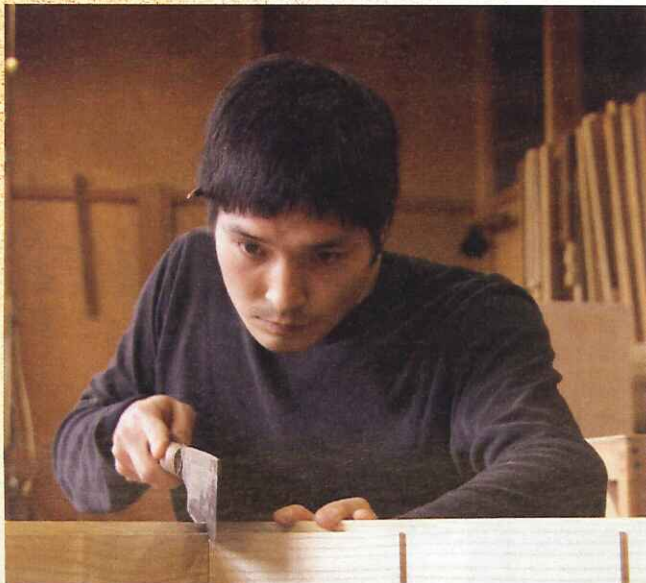


日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



Hiroyuki Sakai

1984年新潟県生まれ。エンジニアを目指して早稲田大学理工学部で機械工学を専攻するが、木工の道に進むために卒業を目前に中退。その後職業訓練校を経て、現在は加茂市内のたんす店で研鑽を積む。



加茂桐たんす (かもきりたんす)

上質の天然桐が豊富な新潟県加茂市でつくられる、国指定の伝統的工芸品。衣類や薬品の箱に始まり、およそ220年前からたんすがつくられるようになった。現在、日本の桐たんすの約7割を加茂市で生産している。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版  
パソコンやタブレットでもご覧になれます。本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。



TV番組  
ディスカバリーチャンネル (CS) 冠番組  
「アットホーム presents 明日への扉」放映中  
毎週金曜日 22:53~23:00



ビジョン  
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!! 最新号のご案内 **好評公開中**

No.074 / 京漆器 塗師 高木 望 氏

## か も きり 加茂桐たんす職人

酒井 裕行 氏

人生を変えた木の温もりと、心を込めて向き合う。

得も言われぬ木肌の趣や温かみと、湿気を通しにくい性質を併せ持つ桐。その桐を用い、気密性に優れた構造に仕上げることで着物をカジなどから守るのが、日本古来の桐たんすだ。

新潟県加茂市。わが国最大の桐たんすの生産地であり、約220年の歴史を持つ加茂桐たんすの本場で、伝統の技を学ぶ若者がいる。木工の仕事に憧れ、大学を中退してこの世界に飛び込んだ酒井裕行さんだ。

きっかけは？

酒井「機械金属の研究に没頭していた大学生のとき、偶然見た木工品に心を奪われたんです。色合いや形が多彩なことに新鮮な驚きを感じ、何よりも自分の手で簡単に加工できるところに惹かれました」

再度学校に入り直して木工の基本

を習得し、やっとの思いで就職した工房で一心に修業を積んできた。そして今、たんすづくりの要所にその成果を発揮する。

例えば板を幾つもつなぎ合わせてつくる、部材の製作。木目を巧みにそるえることで、あたかも一枚の板のように仕立て上げる。また、桐たんすの組立てには木に凹凸を刻み接合するのだが、隙間の無い美しい製品に組み立てるために、0.1mm単位の繊細な調整で素材の特性を生かす。

一番の腕の見せどころは引出しのかんながけ。ほんの少しの判断ミスで気密性が損なわれるため、研ぎ澄まされた勘が必要となる。微妙な手触りと音を頼りに、一回、さらに一回とかなんをかけた引出しをゆつくりと押し込む。すると、もう片方の引出しがスッと飛び出す。内側の空気が逃げ場を失うほど、気密性の高いたんすに仕上がった証しだ。

今の気持ちは？

不断の努力により着実に技を高めているが、大学を中退したことに未練はないのだろうか。

酒井「普通に卒業して機械メーカーに就職していたらと想像する時があります。もし違う道に進んでいても、途中で方向転換していたでしょうね。必ずここに戻ってきたと思います」

最先端を目指していた若者が求めたのは、木の温もり。これからの道はさらに長く、険しいかもしれないが、怯むことなく桐と向き合い続ける。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2012年6月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!  
木に魅せられ、桐たんすづくりに全力で取り組む姿を動画でご紹介しています。ぜひご覧ください。